

## 【研究論文】

# 保育園における保育目標と保育内容の検討 —食育への取り組みを中心に—

鈴木 方子\*

## 要 旨

本稿では、保育園の保育目標と保育課程および年間指導計画と月案における保育のねらいと、実際の保育の内容について検討を行う。1年間の保育の内容の中で、主に行事を通した食育への取り組みに焦点を当て、それらが園の目標とどう関連しているのか、また園の特色としてどのように活かされているのかを検証する。さらにこれからの幼保連携型認定こども園の全体的な計画における「各園の創意工夫」につながる取り組みとなるよう園の職員や保護者との共通理解の基盤として活用するものとする。

キーワード：食育、異年齢保育、保育目標、保育内容、直接体験

## I. はじめに

保育所における保育内容を検討する際、保育の計画が重要であることは言うまでもない。保育の計画に基づいて保育を行い、評価、改善に努めることも含めて保育内容を検討することになる。さらにそれらをふまえて保育の質の向上を図ることが課せられている。

2015年より子ども・子育て支援制度がスタートし、保育の制度は大きな変革期を迎えている。保育所においては、待機児童の増加、長時間保育、保育士不足等、対処すべき課題が山積している。それらに対して保育所増設や定員の増加、環境整備等の対策は、数値で表される事柄としてわかりやすいが、保育内容についての検討はどうであろうか。特に乳児保育、長時間保育の保育内容については、現状をふまえ、将来を見据えた保育内容の検討、構築が最重要課題であると思われる。

筆者は異年齢保育と統合保育を実践している K 保育園の保育の観察を通して、報告を行っている。

<sup>1)2)3)</sup> K 保育園では 1977 年から障害児を受け入れている。当初は年齢別保育を実施していたが、障害児を受け入れる中で、同年齢の集団より、さまざまな年齢の子どもがいる集団の方が障害児にとって過ごしやすいくことから、異年齢保育に移行したという経緯がある。また K 保育園は臨済宗の寺院に隣接する

仏教園であり、毎月の本堂でのおまいりや成道会等の行事が行われている。2015 年度は、園児数 154 名で、3.4.5 歳児の縦割りクラスが 5、1 歳児クラス 2、2 歳児クラス 2 の計 9 クラスで構成されている。2013 年に縦割りクラスが 6 から 5 になり、1.2 歳児クラスが増え、乳児保育の需要が多くなっている。

異年齢保育の特徴は、同年齢保育と比較して、兄弟の少ない時代に異年齢での関わりが重要であるという点、年長児は思いやりの気持ちが育ち、年少児は年長児をモデルとして育つ点が挙げられる。反対に課題として挙げられる点は、就学前の年長児の保育として適切であるのか、製作等への取り組み、年中児の育ち等が挙げられる。筆者は前掲の報告の中で、同年齢の保育の重要性や、年中児の育ち、保育者も含めた人間関係の中でのお互いの育ちについて考察を行った。宮里は異年齢保育を「異年齢と同年齢集団で構成された集団」<sup>4)</sup>とし、同年齢の集団を土台として異年齢集団があると指摘している。異年齢保育の保育内容を検討する際には、同年齢での活動にも目を向ける必要があるということである。

その中で、筆者は、K 保育園の 2015 年度年間指導計画と月案を検討する機会を得た。保育所は、保育所保育指針に明記されているように、保育の目標を達成するために保育課程と指導計画を作成しなければならない。保育内容を検討するにあたって、保育課程、指導計画との整合性を図ることが必須であ

\*岡崎女子大学

る。異年齢保育に関しては、保育所保育指針の指導計画の作成上、特に留意すべき事項として、「異年齢で構成される組やグループでの保育においては、一人一人の子どもの生活や経験、発達過程などを把握し、適切な援助や環境構成ができるよう配慮すること」<sup>5)</sup>と記されている。この適切な援助や環境構成とは具体的に何であり、どのような配慮が保育の目標を達成することにつながるのであろうか。

K 保育園の 2015 年度の月案では、園の特色として食育に関する取り組みを取り上げている。食育の推進に関しては、保育所保育指針では、「食を営む力」の育成に向け、その基礎を培うことを目標としている。留意点としては、子どもが意欲を持って食に関わる体験を積み重ね、食事を楽しみ合う子どもに成長していくこと、食育の計画を作成し、保育の計画に位置付けるとともに、その評価及び改善に努めること、子どもが自らの感覚や体験を通して、食材や調理する人への感謝の気持ちが育つように保育環境に配慮すること、一人一人の子どもに対応することが挙げられている。

今回筆者は、K 保育園の年間指導計画と月案の食育に関する行事に焦点を絞り、保育内容との関連について考察を進めることとした。

## II. 方法

年間指導計画や月案における食育への取り組みと、それぞれの行事の関連性について詳しく検討し、保育課程や年間指導計画との関連についてまとめる。さらにそこから K 保育園の特色を明らかにし、保育の内容の評価及び改善につなげていく。

なお、資料として使用する保育課程、年間指導計画と月案は、2015 年度のものとし、内容については 2015 年度の園のしおり、2014 年度の園だより、保育記録、職員への聞き書きや、筆者の観察記録をまとめた。

## III. 結果及び考察

### (1) K 保育園の保育課程

K 保育園の保育方針は、心と身体の自立を促す保育であり、それに基づいた保育目標は、望まれる子どもの姿と、卒園までに身に付けてほしい力とに分けて設定されている。その内容は、以下の通りである。

○望まれる子どもの姿

- ・人のためにつくせる人になる
- ・悪いことはすぐやめることができる人になる
- ・楽しく遊べる人になる
- ・立派な人になる

この言葉は、朝の会で“私たちは人のためにつくします。私たちは悪いことはすぐやめます。私たちは楽しく遊びます。私たちは立派な人になります。”とクラス全員で声に出して言う。人のためにつくすとは、自分のことより他人のことを思いやることで、人の幸せはもたらされるという考えである。悪いことはすぐやめるとは、悪いことをしてしまったら、すぐにやめることができる態度を身に付けてほしいということである。初めて集団に参加し、相手の存在を通して自分の存在に気付かされる乳幼児にとって、悪いことをしてはいけないと言うのではなく、善悪の判断をすることから始まり、自分のした行為を振り返って、悪いことであつたならばどう対処するのか、周りの人の反応はどうか等経験から学ぶことの重要性に重きを置いていることを知ることができる。楽しく遊ぶとは、自分自身の存在が、性も、国籍も、時代も、家族もどれ一つ、自分で選択できない所でしか始まらないものであれば、別の国に生まれればよかった、違う家族がよかった等、ないものねだりをするのではなく、与えられた条件の中で前向きに、主体的に生きようとの願いを込めたものである。子どもは遊びを通して成長する存在であり、そのためには、自ら積極的に楽しもうとする力が求められるのである。立派な人とは、社会的地位や身分が高い等の世間から見て偉い人という捉え方もあるが、広辞苑によれば、美しいこと、みごとなこと、すぐれていること、文句のつけようもなく十分なさま、とある。立派の語源に仏教の一派を立てるという説があることから、保育園創立者の思いが込められた言葉であろう。

○卒園までに身に付けてほしい力

- ・人の話を聞く力
- ・基本的生活を身に付ける力
- ・ルールを理解し、守る力
- ・よい人間関係を作る力
- ・五感を使い豊かな感性を養う力

望まれる子どもの姿を達成するために具体的に身に付けてほしい力が 5 つ挙げられている。子どもがこれらの力を身に付けるためには、環境に配慮することが求められる。特に人の話を聞く、よい人間関係をつくる、ルールを理解し、守るに関しては、人の環境である園の職員や保育者、友だちとの人間関

係が重要である。

そして五感を使い豊かな感性を養う力については、直接体験の有無が大きな位置を占める。これらの保育方針をふまえ、保育課程が立てられている。

ここでは、保育課程の中で食育に関する部分を抜粋する。なお3.4.5歳児については、それぞれの年齢におけるねらいと、異年齢でのクラスの中でのねらいが立てられている。

1歳児	<ul style="list-style-type: none"> <li>適切な環境の中で、様々な食材を感じ食事の楽しさを味わう。</li> <li>保育者に手伝ってもらいながら、自分で食べることに挑戦しようとする。</li> <li>食事にマナーがあることを知る。</li> </ul>
2歳児	<ul style="list-style-type: none"> <li>適切な環境の中で、様々な食材を感じ、食事を楽しむ。</li> <li>食事のマナーに関心を持ちながら、友だちや保育者と一緒に食事をする雰囲気を楽しむ。</li> </ul>
3歳児	<ul style="list-style-type: none"> <li>友だちと一緒に食事をすることを楽しむ。</li> <li>苦手なものも少しずつ食べられるようになる。</li> <li>食べきった満足感を保育士と共有する。</li> </ul>
4歳児	<ul style="list-style-type: none"> <li>いのちと食に関心を持つ。</li> </ul>
5歳児	<ul style="list-style-type: none"> <li>いのちと食のつながりを知る。</li> </ul>
◎3・4・5歳児	<ul style="list-style-type: none"> <li>食べ物を残さないで食べる。苦手なものも少しずつ食べられるようになる。</li> <li>食べ物の収穫を楽しむ。</li> <li>生飯（サバ）を通して、命を頂くことを知る。</li> <li>食べ物を大切に作る。こぼさないように食べ、こぼしたらごめんなさいの気持ちを持つ。</li> <li>食事のマナーを身に付ける。</li> <li>おいしいものは分け合うとおいしいことを知る。</li> <li>季節の行事で食べ物を作ることを楽しむ。（カレーライス、焼き芋、芋きんとん、月見団子、花きり団子、もちつき）</li> </ul>

◎の部分が異年齢クラスにおける食育のねらいで

ある。命を頂くことへの感謝の気持ち、他者との気持ちの共有を基本にして、残さず、マナーを身に付けて食べるためのねらいが示されている。

## （2）年間指導計画における食育への取り組み

この項では、前項の保育課程に基づいて立てられた年間指導計画に記載された食育に関わる行事について取り上げる。

### ○Ⅰ期（4月～6月）の行事

さつまいもの苗植え、きゅうりと朝顔の種まき、玉ねぎとじゃがいもの収穫

### ○Ⅱ期（7月～9月）

お泊り会でのカレーライスづくり

### ○Ⅲ期（10月～12月）

いもほり、おいもパーティー

### ○Ⅳ期（1月～3月）

ドーナツづくり、ハングリーディ、もちつき、きなこ挽き

これらの食育に関する行事を年間の行事予定と合わせて再編すると、大きく以下の4つの流れにまとめることができる。

#### ①おいもパーティー

さつまいもの苗植え、収穫、おいもパーティーでの芋きんとんづくり、焼き芋の喫食

#### ②お泊り会のカレーライスづくり

きゅうりの種まき、きゅうりと玉ねぎとじゃがいもの収穫、それらの材料を使ったお泊り会でのカレーライスづくりと喫食

#### ③団子、ドーナツ、もちつき

月見団子づくり、ドーナツづくり、花きり団子づくり、きなこ挽き、もちつきと喫食

#### ④ハングリーディ

おにぎり持参の河原の遠足、おにぎりのみの給食のハングリーディ

大きく収穫、調理、喫食とに分けられるが、以下にこれらの取り組みの詳細と、保育の目標との関連についてまとめる。

## （3）おいもパーティー

6月に5歳児は園舎の南側にある畑にさつまいもの苗を植える。収穫が近付くとまずは畑に行っているものつるを抜く。抜いたつるを使って園庭で遊ぶ。身体に巻き付けてスカートやベルト、首飾りにして変身ごっこを楽しんだり、縄跳び、綱引き、電車ごっこでは、友だちと一緒に遊びを楽しみ、いもほりへ

の期待が高まってくる。

いもほりは、保育者が芋の周りの土を大きなスコップで掘り起こした状態で、子どもたちはスコップを使わず素手で掘る。芋の先が見えてあわてて引っ張ると折れたり、抜けなかったりするが、芋がどんなにしっかりと大地に根を張っているかを体験することがねらいである。苗が芋になるという成長も自分の目で確かめ、自分で掘ったという収穫の喜びを味わう。

いもほりの後、おいもパーティーの日を迎える。この日はまず園庭で火をおこしてたき火をし、焼き芋を作る。火おこしは園長が虫メガネを使い、太陽の光から火をおこす。お天気次第ではあるが、それもまた、子どもにとっては貴重な体験である。5歳児は火の当番をするが、現代社会では、たき火をする機会はほとんどなく、火に触れる機会も少なくなっている。たき火から舞い上がる煙のにおいに、くさい、変なおいという子どもがいたという。煙い、煙たいという経験をしたことがなければ、たき火のにおいもくさいものとしてしか受け取れないことは当然であろう。改めて直接火や土に触れる経験の重要性を知ることができる。焼き芋はおやつの時間に皆で食べる。真っ黒に焦げたり、固かったりする部分もあるが、おいしいといって食べる子どもが多いことは、自分で掘り、作った焼き芋だからおいしく感じるということを知ることができる。

たき火の後は部屋で、給食室で蒸したさつま芋をすりこ木でつぶして丸めて芋きんとんを作る。芋に塩をふっただけでラップにつつんで丸めて作る。1つはおやつ時間に友だちと一緒に食べ、1つは家に持って帰る。おいしいものは分け合って食べるともっとおいしい経験を家族と分かち合う。

家族の反応もさまざまである。「甘くておいしいから砂糖がはいっていると思っていた」「子どもが食べてしまって一度も食べていない」等、おいもパーティーの日は、保護者にも子どもの楽しかった、おいしかった体験が伝わっていくのである。分け合うよりも自分で食べたい子どもの気持ちを受け止めている保護者の存在も重要である。

#### (4) お泊り会のカレーライス

お泊り会は7月下旬の金曜日午後から土曜日朝まで年長児が保育園に宿泊する行事である。お泊り会の合言葉は「自律と仲間」である。年長児が自律に向けて仲間と一緒に時間をかけて準備をするところからお泊り会への取り組みは始まっている。

5月下旬になると5歳児は、お泊り会の夕食のカレーライスに入れる玉ねぎを畑で収穫し、お泊り会までネットに入れて干しておく。6月上旬にはきゅうりの種をまく。きゅうりがだんだん大きくなる過程を、お泊り会への期待とともに味わう。お泊り会では、子どもたちできゅうりもみを作って味わう。

1日目の午後の仕事は夕食のカレーライスづくりで、クラスで協力して作業をする。前日に玉ねぎ切りを終え、当日はクラスごとにきゅうり切り、じゃがいも切り、米とぎ、にんじん切りを担当する。園庭のかまどでご飯を炊き、カレーを作る過程を皆で楽しみながら見る。食べ物はお店で買うだけではなく、玉ねぎやじゃがいもは土と水で育つものであることを知り、手間暇かけて調理をすることで、いのちと食とのつながりを体験から理解することにつながる。また仲間と一緒に調理をし、仲間の大切さを再確認する場でもある。

#### (5) 団子、ドーナツ、もちつき

9月のお月見には5歳児が月見団子を作っておやつ時間に皆で食べる。団子づくりは各クラスで行い、5歳児が団子をくるくる丸める様子を真剣に見ていた3.4歳児にとって、5歳児の手は魔法の手となり、その手から生まれた団子のおいしさは特別なものとなる。

1月には新年の行事として保護者の協力を得てドーナツづくりを楽しむ。粉の味見は全員で行い、卵を混ぜるのは5歳児である。粉の中に卵を割り入れる5歳児の手元を3.4歳児はじっと見つめている。4歳児はこの後家で卵を割る練習をしていると保護者から聞くことがある。5歳児の動作を見て、真似て、自分のものにしていく過程は、異年齢保育での大切な学びである。牛乳をまぜて生地を作るのは保育士、その後全員で形を作り、揚げるのは保護者である。危険がないように見守っているが、形が変化していくとともに、甘い香りが部屋いっぱいに広がり、五感を総動員して既製品では味わうことができない手作りの味を楽しむことができる。

2月のお釈迦様が入滅された日の行事である涅槃会には花きり団子を作ってお供えをする。粉にしたうるち米にお湯をいれて大きな団子にして蒸し、色をつけて細長くしてから切る。その過程を見て、花きり団子は家に持ち帰る。

そして2月下旬にはもちつきを保護者も参加して行う。感染症予防の観点から変更せざるを得ない点もあるが、家庭や地域からもちつきがなくなり、大

人が協同で作業をする場として大切な行事である。もちつきの前にはまず5歳児が石臼でのきなこ挽きを体験する。大豆がきなこになる過程を石臼を挽きながら経験するが、きなこの香りが園中に広がり、その匂いも子どもにとっては得難いものである。そして前日には、冷たい水でもち米を研ぎ水に浸しておく。翌日蒸した米を味見して、もちをつき、つきたてのもちに自分たちで挽いたきなこをつけて皆で味わう。米がもちに変化していく過程を見て体験し、味わうことで、食べ物への関心がより深まる。

月見団子、花きり団子ではうるち米、もちつきではもち米と日本で受け継がれてきた米を味わう機会でもあり、味わったり匂いを嗅ぐことで子どもたちの五感に響いていくのである。

#### (6) ハングリーディ

この日は給食がいつもの時間に用意されず、午後になってから園庭のかまどで炊いたごはんをおにぎりにして食べる。子どもたちはいつものように遊んでいるが、だんだん給食がいつもの時間に用意されないことに気付き、電気のついていない給食室をのぞいたりし始める。普段のおやつ時間近くになっておにぎりを食べる。園庭にしつらえたかまどで炊いたご飯に梅干しを入れたおにぎりだが、空腹を体験した後のおにぎりのおいしさは格別である。

これは、お正月休み明けに子どもたちの話題に上ったお年玉の額が、幼児であるにもかかわらず、万を超える額であることに驚いた保育者が、難民の写真集で同年齢の飢えた子どもたちの存在を知らせることから始めたお年玉募金に端を発している。しかし数年続けるうちに、日本の子どもたちは、飢えるということをどのように理解しているのかが疑問となり、空腹を直接体験する機会として試みた。最初は保護者からの批判があるのではと心配していたが、家庭では体験させられないこととの好意的な投書を地方新聞に投書した保護者の存在もあり、その後年中行事として行われている。

このおながが空く体験は、飽食の現代社会の中で食べられることに感謝する気持ちを育てるとともに、同じ地球の中に食べるものがなくて困っている仲間がいることを知る機会となっている。保育者は、子どもの空腹の表現を受け止め、共感していく。それにより、お腹は減っているがその思いを受け止めてくれる保育者の存在を感じ、自分一人ではなく、保育者や友だちの存在の大切さを知る機会ともなっていく。こうして、いのちと食とのつながりについて

体験を通して理解していくのである。

#### (7) 保育の中での取り組み

普段の保育の中でも、食育を意識した取り組みがなされている。

##### ①食前のあいさつと生飯（サバ）

K 保育園は仏教園であるので、食前のあいさつも命を頂くことへの感謝を言葉にしている。“私たちは、今この給食をよく噛んでよく味わっていただきます。ののさま、おとうさま、おかあさまありがとうございます。先生いただきます。給食のおばさんありがとうございます。お当番さんありがとうございます”という文言である。佐藤が「すべての人にいのちを大切にすることを育てるためのヒントが食べるという営みから得られる。仏教と食事はいのちを共通のキーワードとしてつながってくる。食事はいのちについて考える絶好の機会」<sup>6)</sup>と述べているように、仏教保育では食育は当然重要なものとして位置付けられている。また毎回の給食では、当番が一人一人を回って、ほんの少しの食べ物を集め、園庭で飼っている鶏の餌にしている。これは仏教用語では生飯（サバ）とあって、命を頂くことへの感謝の気持ちと共に、食前に食べ物を取り分けて命あるものに施すことを指す。

##### ②当りにんじん

カレーや汁物などににんじんが食材として使用される際、星形のにんじんが入っていることがある。にんじんが苦手な子どもがいたので始めたのだが、当たった子どもは大喜びで給食室に報告に行く。報告に行くと給食のおばさんが笑顔で抱っこしてくれる。特別なプレゼントではないのだが、子どもにとってはうれしいことの1つで、いつのまにかにんじんが好きになっていく。当りにんじんという命名そのものが、子どもの視点に立っており、苦手な食べ物を少しずつ食べられるようになるための工夫である。

##### ③玉ねぎの皮むき

次の日の給食の食材に玉ねぎが入っていると、皮むきをクラスで順番に担当する。テラスに座って大きなバケツに一杯の玉ねぎの皮をむくのだが、薄皮をむくことに苦労したり、玉ねぎが転がってしまったり、なかなか思うようにはいかないが、友だちと一緒に集中して取り組んでいる。食材に触れる体験とともに、次の日の給食で、自分のむいた玉ねぎがどう調理されて出てくるかにも関心をもつことができる。また、楽しみながら手を使う作業を身に付け

るよい機会となっている。

#### ④ レストランごっこ

1年の保育の締めくくりとなる3月に、3.4.5歳児がホールで一緒に給食を食べる。その日はバイキング形式で、おかわりは自分で何回もおかわりをするができる。好きなものを好きなだけ自分で選んで食べる楽しみを味わうとともに、5歳児は3.4歳児をもてなす喜びを味わう。3.4歳児は普段とは違う食事の雰囲気を楽しむ。

保育者にとっては、子どもが自分の食べたい量を自分で考えることができるのか、年下の子どもの配膳をどのように手伝っているのか等、1年間の子どもの食事への援助について確認をする場となっている。

## IV. まとめ

保育園の1年間を食育にまつわる行事を中心に保育目標との関連についてまとめた。この過程を通して、改めて園の保育目標、保育課程、指導計画と保育内容について振り返る機会となった。日々営まれている保育が、園の保育の理念、望まれる子どもの姿につながり、身に付けてほしい力を具現化したものになっている。そしてK保育園の特色である異年齢保育での様々な人と関わる経験が、大きな意味を持っていることが理解できる。5歳児が調理することを3.4歳児が見ている場面があるが、3.4歳児にとっては、5歳児がモデルとなり、いつか自分もやってみようと思い、我慢する力も身につけているのである。現代社会においては、少子化の影響もあり、子どもが我慢をする機会は減っているのではないだろうか。K保育園には5歳児のみに与えられた役割がたくさんある。次は自分の番だという気持ちで5歳児の行動を見守る4歳児の表情は、真剣そのものである。4歳児は4月に進級すると、張り切って5歳児としての役割を果たそうとする。異年齢保育の特徴が、同年齢での活動を基盤にしていることを読み取ることができる。こうして保育の中で大切にしているものが子どもから子どもへ引き継がれていく。

その上でK保育園で大切にしていることは、直接体験をすることである。作物の収穫や調理を実際に経験することで豊かな感性が育まれる。煙のにおいを体験することも大切だとの思いから、たき火での焼き芋が行われる。そのためには保育者の適切な援助と環境構成が欠かせない。安全管理が十分にでき

ていることが前提であり、たき火をする意図を理解し、互いに連携を取りながら子ども一人一人に対応している保育者集団の存在が初めて成立するのである。

またK保育園は仏教園であり、園内にはののさまの存在があり、強制されるものではないが、子どもたちが自然に手をあわせる姿が見られる。園の環境としてののちを大切にする姿勢があり、それが子どもたちに日々の保育の中で培われていく。

さまざまな連携も重要である。保育者間の連携は言うまでもないが、調理に関しては給食室との連携、保護者との連携があっはじめて行うことができるものが多い。しかし、これらの行事を円滑に進めていくためには、保育者の適切な援助が不可欠である。かまどでの炊飯やもちつき等、保育者も経験しておらず、それらを伝承していくことも大切であるが、なかなか時間がとれない現実がある。また畑の水やり等、地域の人々に協力していただいていることもたくさんある。これらの連携があっ、この輪の中心に子どもたちが存在し、健やかな育ちにつながっていくのである。

保育の計画については、柔軟で発展的でありながら、一貫性が必要である。計画通りではなく、柔軟に対応しながらも、最終的には望まれる子どもの姿をめざして日々保育が営まれている。そのためには、計画も常に見直すことが重要である。一連の行事も、自然現象や、感染症の流行等により、変更せざるを得ないことは度々である。K保育園では、運動会をカーニバルと呼び、親子のふれあいをテーマにして開催している。4月当初の年間計画で予定された日が雨天の場合、延期するのではなく、雨の日用のプログラムでカーニバルを開催する。それは、カーニバルのねらいが、親子のふれあいであり、保護者の仕事の都合にも配慮してのことだからである。このねらいをはっきり打ち出すことが、一貫性につながると考える。また、記録を書くこと、計画を立てることは、保育所実習をさせていただく学生にとっても必須である。それが、実際の保育と結びついた時に保育を振り返り、次の保育へつなげていくための基本となることを改めて認識した。

今回は食育に注目したが、保育内容の評価、改善までを考察するには至らなかった。今後はこの保育をどう評価していくのかを考えることが必要である。子どもの視点、保育者の視点、保護者の視点それぞれから検討していきたい。また、保育者も含めた異年齢保育における人間関係を、保育目標や保育課程

と関連づけながら考察していきたい。

#### 引用・参考文献

- 1) 鈴木方子・村田暢子「異年齢の遊びの中で～年中児と一歳児のかかわり～」  
『日本保育学会第 68 回大会発表要旨集』16013  
2015
  - 2) 村田暢子・鈴木方子「遊びを通して育ちあう環境づくり～個性を認め合いながら～」  
『日本保育学会第 67 回大会発表要旨集』p.760  
2014
  - 3) 鈴木方子・村田暢子「異年齢保育での年長児の育ち合い」『日本保育学会第 66 回大会発表要旨集』  
p.878 2013
  - 4) 宮里六郎「乳幼児期の保育のあり方について～異年齢保育の視点から～」『保育通信』・No.4 2015  
pp.26-31
  - 5) 「保育所保育指針〈平成 20 年告示〉」厚生労働省  
フレール館 p.24
  - 6) 佐藤達全「仏教保育と食育について」『鶴見大学  
仏教文化研究所紀要』 No.19 pp.164-187 2014
- ・ 柏井保育園・鈴木方子「保育カリキュラム異年齢  
保育 年間計画」「4・5・6月の月案」  
『ポット』別冊・8 (1) p.18、p.20 チャイルド  
本社 2015
  - ・ 柏井保育園・鈴木方子「保育カリキュラム異年齢  
保育 7・8・9月の月案」  
『ポット』別冊・8 (3) pp.8-9 チャイルド本社  
2015
  - ・ 柏井保育園・鈴木方子「保育カリキュラム異年齢  
保育 10・11・12月の月案」  
『ポット』別冊・8 (6) pp.8-9 チャイルド本社  
2015
  - ・ 柏井保育園・鈴木方子「保育カリキュラム異年齢  
保育 1・2・3月の月案」  
『ポット』別冊・8 (9) pp.8-9 チャイルド本社  
2015
  - ・ 柏井保育園 保育課程
  - ・ 柏井保育園のしおり 平成 27 年度版
  - ・ 柏井保育園 園だより 平成 26 年度版

#### 謝辞

資料の提供にご協力いただきました、社会福祉法人柏井会理事長、柏井保育園園長を始めとする職員の皆様に厚くお礼申し上げます。